


一輪車のパンク ひがし保育園（秋田県秋田市）

子どもたちは毎日のように一輪車の練習をしている。一輪車の空気が抜けたりパンクしたりした時、園長先生や自転車屋に依頼して直してもらう。

子どものつぶやき・反応	保育者(園長)の援助	観 点
<p>タイヤの様子を異常を感じる。 「パンク直して」「空気を入れてください」 園長先生が空気を入れているところを見る。 「タイヤがふくらんだ」「硬くなった」「空気は力持ちだから乗れるんだ」「自動車にもタイヤが付いている」「飛行機にもタイヤ付いている」「空気は飛行機も持ち上げるんだ」「すごい力持ちだね」 園長先生の作業を見る。 「タイヤの中からやわらかいチューブが出てきた」「空気を入れたらチューブが大きくふくらんだ」「あんまり入れるとタイヤの中に入らないよ」 水の中のチューブを見る。 「穴が開いた所からブクブク泡が出てきた」「先生、このブクブクは空気なの?」「空気は穴から逃げるんだね」「水の中にストローで吹いてもブクブク出てくるよ」「空気がなくなったらペシャンコになった」「ペシャンコだと一輪車は動かないね」 パンクの修理の様子を見る。 「穴をのりで貼ったら、また空気が入ったね」「水に入れてもブクブク泡が出なくなった」</p>	<p>「空気を入れましょう」と言い、子どもたちの所で入れる。</p>  <p>「こっちはパンクかもしれないから調べてみましよう」と言い、タイヤの中のチューブを出す。 「水に入れてみましょう」と言って、入れて泡の出る様子を見せ、「やっぱりパンクだ」と言う。 自転車屋に、園でのパンクの修理を依頼する。</p>	<p>感じる 気付く 知る</p> <p>感動する 興味の増幅 関心の高まり</p> <p>想像する 好奇心の高まり(もっと見たい・知りたい) かかわる 試す 考える 追求する イメージする 納得する</p>

<子どもの変容>

- ・毎日練習しているため、タイヤの空気が抜けたことやパンクしたこと、パンクすると乗れないことなどを、体験を通して知っている。
- ・空気を入れる様子に関心を深めることで「空気入れが熱くなった」「本当だ」と言い、摩擦熱に気付き、驚きや発見を表す子どもがいる。
- ・「空気は力持ちだから、人が乗ってもつぶれないんだ」ということを考えつき、「自動車にもタイヤがついているね」「お父さんはガソリンスタンドで空気を入れてもらっているよ」「お父さんはダンプの運転手だよ。タイヤは重いダンプでもつぶれないよ」と、自分の身近な情報と重ね合わせて考えたり、幼児なりに考えを出し合って追求したりする姿が現れる。



納得

一輪車は、タイヤの空気の力で乗ることができる。タイヤの空気が少なくなったりパンクしたりすると乗ることができないので、タイヤに空気を入れたりパンクを直したりしなければいけない。

みどころ

「パンクする」という状況は、言葉として知っていることです。しかしこうした遊びを連日楽しみ、「一輪車に乗りたい」という意欲的な思いや「ひとつのタイヤで自分の体が支えられている」という感覚があるので、興味や考えが深まるやりとりが引き出されています。そして、「空気が少なくなったから」「パンクしたから」空気を入れてもらうという行動が、「どうして空気を入れたりパンクを直したりする必要があるか」納得して行う活動になっています。